ている[3]。本書においては、イスラーム「○○」の○○をほぼ限定できるような書き方をしている記事もあれば、どの意味で使っているのか判然としないケースも一定数あった。一つ例を挙げてみよう。「欧米社会と①イスラームに当てはめて考えるならば、②イスラーム側が世俗主義を受け入れるのを期待するだけでは一方的な押し付けとなろう。相互補完的であるためには、「われわれ」非ムスリムもまた③イスラームを理解しようと努め……」（257頁、丸数字と下線は引用者による）における①は、欧米社会に対応するのだからイスラーム教であるとは考えにくく、イスラーム社会、イスラーム共同体あたりを意味しているものと思われる。②はイスラーム教、イスラーム文化、イスラーム教徒のどれでも通じそうであり、③はイスラーム教かイスラーム文化だろうか。些細な問題のように映るかもしれないが、文章全体として指し示しうる内容には相当のぶれが生じているのも確かである。研究書であれ入門書であれ、基本的な用語の意味が読者の受け取り方によって変わってしまうことは望ましいことではない。意味が曖昧な「イスラーム」表記は極力避けるべきだろう。

二つ目の問題点は、「あとがき」における以下のような記述である。

> 近年のイスラームへの関心の高まりによって、イスラームに関する書籍が増えてきた。その中にはイスラームを本質的に平和な宗教であると言ってみたり、楽観的にムスリムとの共生の可能性を謳うものもある。かと思えば、その「アンチ」として論戦を張っているつもりであろうか、過去の事実や聖典の明文などを持ち出して根本的に西欧近代の価値とは相容れない宗教であり、共生は不可能であると言うものもある。
>
> どちらの言い分も本質主義的であり、現実をよく見ない「そもそも論」であることが多い。ただ面倒なのは違和感を強調する後者の場合である。……（中略）……日本の現状を顧みるならば、私たちは皆イスラームの専門家として自分の言動の影響についても慎重になるべきことが求められる。（271頁）

「自分の言動の影響について慎重になるべき」であるという結論については異論がないが、端的に言えば、楽観的に共生を謳う著者と共生は不可能であると言う著者とは具体的に誰なのかを明示するべきである。そうでなければ、読者として想定されている社会人、学生は状況を評価できず、ひいては本書の真価も理解できないということになるからである。評者は、後者としては池内恵、飯山陽が想定されていると推測するが、もしそうであったとしても、質的に異なる両者の著作のどちらが想定されているのか、あるいは両方なのかは分からない。楽観的な著作については、いかにもたくさんありそうだが特定することは難しく、一般向け書籍であれ学術寄りの書籍であれ影響力の大きい著作があるとも思えない。両端がはっきりしないことには、その中道がどこにあるのか分かるはずもない。名指ししないのであれば、このような記述を挟む必要もないだろう。

あえて2点の問題点をあげてみたが、いずれにしても本書の価値を毀損するものではない。一般向けの概説書ではあるが、特に若手研究者が執筆した章は評者の知的好奇心を大いに刺激してくれた。研究者にも一読を勧めたい一冊である。

（菊地　達也　東京大学大学院人文社会系研究科・文学部准教授）

井筒俊彦、鎌田繁（監訳）、仁子寿晴・橋爪烈（訳）『イスラーム神学における信の構造――イーマーンとイスラームの意味論的分析』（井筒俊彦英文著作翻訳コレクション）慶応義塾大学出版会　2018年　414＋20頁

イスラームには、ムスリム全体を一つの共同体と見做す思想がある。その一なる共同体の基盤を為すのは信仰（イーマーン、īmān）であるとされる。しかし、同時に、イスラーム教徒同士であっても、互いに自己

3）たとえば内藤正典『イスラムの怒り』集英社新書、2009年、あるいはBS1スペシャル「イスラムに愛された日本人――知の巨人・井筒俊彦」（2019年11月8日、NHK BS1）における「イスラム」は人間集団を指しているとしか思えない。

の属する宗派の教説に基づいて、他のムスリムが共同体の構成員であることを否定し、イスラーム社会から排斥しようとすることが昨今起こっている。このような相反する面を同時に持つ、ムスリムの信仰はどのようなものか、また、それについて、ムスリムの間でどのような論争があったのか。

それらの問いに答えようとするのが、世界的に著名な学者である井筒俊彦の『イスラーム神学における信の構造――イーマーンとイスラームの意味論的分析』(以下、『信の構造』と呼ぶ)である。本書は英語からの翻訳であり、原著は、1965 年に同氏によって慶応義塾大学言語文化研究所(The Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies)から刊行された *The Concept of Belief in Islamic Theology: A Semantic Analysis of Īmān and Islām* であるが、翻訳の底本となったのは、Keio University Press による 2016 年出版の改訂版である。

『信の構造』は、イスラーム諸学の中でも、イスラーム神学[1)](カラーム、'ilm al-kalām もしくは、アカーイド、'ilm al-'aqā'id)の範疇に入る[2)]。イスラーム神学における「信」をめぐる学問的な参照点は、井筒も指摘するように[17–18 頁]、1)主体(信ずる側)、2)信ずること自体、3)信ずる対象の 3 点があるが、本書は、主に 1)と 2)に焦点が当てている。日本では「六信五行」などとして知られる、ムスリムが信仰し、実行すべき事項等が含まれる 3)については、言及が少ない。

本書の特徴の 1 つは、「意味論的分析(semantic analysis)」と呼ばれる方法論である。著者によると、意味論的分析とは「ある世界観全体の一断片、ないし複数の断片を分析すること、それも、そうした一断片ないし複数の断片を言語的に言い表すキーワード群を分析することで為される分析的研究」[368 頁]である。井筒は、この分析方法を通して、7 世紀後半に起こったハワーリジュ派(al-Khawārij)の運動から 18 世紀までの 1000 年間に執筆された 50 点近い一次資料から、110 人以上のイスラーム神学者の思想に見られる「イーマーン」、「イスラーム(islām)」、「クフル(不信、kufr)」、「タスディーク(是認、taṣdīq)」、「アマル(行、'amal)」、「カウル(言、qawl もしくは、イクラール、iqrār)」等について叙述する。しかし、それらの概念の辞書的および応用的な意味にのみとどまらず、それらの間に組み込む、(井筒の方法論の術語でもある)「同義(synonymous)」、「対義(antonymous)」といった様々な関係性によって生じる意味の変化についても語られている。

本書は、以下の 11 章から構成されている。

第 1 章　不信心者(kāfir)
第 2 章　タクフィール(takfīr)の概念
第 3 章　重罪人(fāsiq)
第 4 章　イーマーン(īmān)とイスラーム(islām)
第 5 章　信という概念の本質的構造
第 6 章　信と知
第 7 章　是認としての信
第 8 章　信ずることと言葉で告白すること
第 9 章　信と行
第 10 章　私は信ずる者だ。もし神望み給うならば
第 11 章　イーマーンの創造

1)　イスラーム神学は井筒の若い頃からの関心の一つであった、と彼の弟子の牧野信也は、師の別の著作である『イスラーム思想史』の解説の中で述べている[井筒 2005: 497]。同書において井筒は、クルアーンにおける神の予定(宿命論)と人間の自由意志をめぐる神学的な論争に焦点をあてつつ、イスラーム神学の成立を通史的な観点から述べているが、『信の構造』においては、異なるテーマと方法論を採っている。井筒の神学に関する他の研究としては、日本科学哲学会ロゴス自由大学編『世界哲学講座(5)』(1948 年、光の書房)に収録された「アラビア哲学一回教哲学」がある。この論考は、慶応義塾大学出版会から 2011 年に出版された『アラビア哲学』に再録されている。この論考の主題はイスラーム哲学であるが、井筒はイスラーム神学をその最初の段階として取り扱い、理性主義のムウタズィラ派と、ムウタズィラ派から離れたアシュアリー(Abū al-Ḥasan al-Ash'arī, 936 年没)および彼の学派のイスラーム哲学の形成への貢献について論じている。一方で、それら以外の学派やイスラーム神学の内容については詳しく言及していない。

2)　分派や異端とされた諸派の信仰(本書では「信」と呼ばれる)に関する教説も含んでいるため、「諸宗教諸分派学('ilm al-milal wa al-niḥal)」にも関わると言える。

さらに『ブハーリーの正伝ハディース集』に収録されたイーマーンに関するハディース（「信の書」）の日本語訳が付され、巻末には、監訳の鎌田繁による解説およびあとがきが収録されている。

本書評では、まず、本書の内容を大まかにまとめる。次に、その方法論について考察する。続けて、翻訳としての側面についても検討する。最後に、類書との比較もしつつ、本書のイスラーム神学の観点からの意義について述べる。

さて、本書の内容であるが、序論では、本書の目的が「信」および他の鍵概念の意味論的な分析であると明記される。

第1章の主題は、「不信心者（カーフィル）」である。「信」に関する著作が、その対義語である「不信（クフル）」、そして、スンナ派ではなく、イスラームの最初の分派であったハワーリジュ派の考察からはじまることを読者は奇妙に思うかもしれない。こうなった理由は、本書の構造言語学的（structural linguistics）な方法論にあるのだが、この件は後に詳しく述べる。

第2章の主題は、タクフィール（誰かを不信心者と非難すること）である。井筒は、ハワーリジュ派が政治的な手段として利用したタクフィールが、次第に展開してゆく神学的な論争においても、危うく互いに行使されるようなったと指摘したうえで［31頁］、神学者たちによる様々なタクフィール説と、その「正しい」使い方に至る思想的過程を明らかにしようとする。

第3章では、タクフィールするに値する具体的な思想や行為、即ち「重罪（kabīra）」と「重罪人（fāsiq）」をめぐる論争が取り上げられる。行為者を不信者と見做すに至る「重罪」とは何か、そしてその行為者たる「重罪人」を不信者と見做す思想はどのようなものか、2節に分けてそれぞれを考察している。

第4章からは、本書の本題である、イーマーンとイスラームの意味論的分析について論じはじめる。本章で繰り広げられる議論を、1）イーマーンとイスラームのうち、どちらが意味内容において広いか、2）イーマーンとイスラームは同一の事柄を示す2つの名に過ぎないか、という2つの問いにまとめて、各学派の教説と学派間の論争を参照しつつ、それぞれについて詳しく回答していく。

第5章は、分派の一つであるムルジア派（al-Murji’a）によって提起された［134頁］イーマーンの本質的構造に関わる議論を行う。まずは、アシュアリー（Abū al-Ḥasan al-Ash‘arī）の著作『イスラームの徒の言説集（*Maqālat al-Islāmiyyīn*）』に基づいて、ムルジア派の主要な思想家によるイーマーンの構造に関する様々な言説が紹介されている［135–145頁］。次に、ムルジア派のイーマーン論に対する反論についても語られ、特に批判される点は、課される「行（アマル）」を為すより「知ること」が重視されること、アマルに二次的重要性が与えられたことである、と述べる［155–156頁］。

第6章では、イーマーンの基本的要素に関する議論がはじまる。スンナ派の教説に入る前に、ムルジア派のイーマーン論の特徴として指摘された「知（マアリファ、ma‘rifa）」をめぐる各学派による異論が取り上げられている。

続く、第7～9章は、「信」の諸基本要素（タスディーク［もしくはマアリファ］、イクラール、アマル）について詳しく叙述する。各章で1つの「信」の基本要素が取り上げられ、まず、当該の要素に関する神学史における論争について考察される。その後、その要素を特に重視した学派や、学者による見解に基づくイーマーン論が詳しく取り上げられている。

第10章は、信ずる者の個人的な実存的決定に関わる2つの概念について扱う。第1は、己の「信」を告白する際に、「私は信ずるものである、もし神が望み給うならば」のように、条件文付きで表現を和らげることと定義される「イスティスナーウ（istithnā’）」についてである［309–315頁］。第2は、イスティスナーウと深く関わる、「最期の行為（khātima、または muwāfāt）」に関する議論であるが、一般に、ひとのイーマーンないしクフルは、どのような生活を送ったかではなく、自身の死の瞬間にどちらを採ったかによって決定されることである、と諒解されている［316–322頁］。

最終章である第11章は、イーマーンの創造という特殊な問題に関わる論争についてである。まずは、広く、人間の行為の創造の問題からはじまり、その起源はムウタズィラ派の「神は悪を創造しない」という「神の義（‘adl）」説に遡ると説明されている。次に、論争を引き起こした原因は、「イーマーンも含めて、人間の行為は、神によって人間のなかに作られるから悪行の責任は神にあるか、それとも、行為は人間によるものであるため、その責任は全面的に人間の側にあるのか」という難題であったと指摘された後に、各学派

の立場について詳しく検討されている。

結論では、本書の意味論的分析という方法論を通して得られた結論について主に語られている。それによれば、2つ以上のキーワードが密接に絡み合うことによってできる意味領域には、それを形成する3つの経路がある。第4章で検討されているようにイーマーンとイスラーム等が為す「同義的結合」はその一つである。第2は、最初の3章で取り上げられているイーマーンとクフルの対立が好例であるように、「反意的結合」である。最後は、一つの概念が一定数の構成要素に分かれて、そうした構成要素の各々が一つのキーワードで言い表される場合の結合であるとされているが、本書の中では、第5章から第8章にかけてのイーマーンの基本要素に関する神学的な論争がそれに該当する。

以上から、本書は、「信」について、二通りの構造を描いていることがわかる。一つ目は、第5〜9章において取り上げられているように、マアリファ、タスディーク、イクラール、アマルによって構成される、「信」の「基本要素」と呼ばれているものである。その中には、冒頭の諸章において解説されている、クフルやニファーク（偽善、nifāq）等は含まれない。しかし、なぜ本書の冒頭において、90頁もの紙幅を費やしてまで、「信」の要素でない、それらの概念について述べられているのか。その回答は、結論の中に見いだせる。先述した、「信」の意味的領域を形成する3つの経路というのが、まさに本書において描写が目指されている「構造」のことであり、同時に、本書における「信」の第2の構造の枠の中には、第1の基本要素説と異なり、対義語のクフルも入ることになる。通例では排除されるべきクフルを「信」の構造中に組み込む捉え方は、どこから来るのであろうか。評者は、本書において影響が見られる構造言語学に由来すると考えている。そこで、まずは、構造言語学について簡単に説明しよう。

構造言語学は、20世紀にヨーロッパで盛んになった学問である。その主張の一つに、言語は社会集団が共有する様々な記号（語、音）の体系、もしくは構造として見做される、というものがある［太田 1960: 5–6］。構造言語学の目的は、ある特定の言語の構造や世界観を明らかにすることであるが、それを実現するためには、その言語が時代の流れに沿って進化する側面（通時的、diachronic）よりも、超時空的な側面（共時的、synchronic）の様態、多くの場合は現時点における様態の解明を重視する［ソシュール 1991: 88］[3]。その構造を描こうとする理論の一つに、グレマス（A. J. Greimas）の「意味の四角形説（the semiotic square）」がある。それによれば、ある語の構造とは、その語の対義語および両者の否定形との間に組み込まれる「相反（contrary）」、「矛盾（contradiction）」や「含意（implication）」といった様々な関係によって展開する意味的体系である。その体系が四角形で表されることから、「意味の四角形説」とも呼ばれる。グレマス自身による「生」と「死」の例を引用すれば、「生」の意味の全体像が、その対義語である「死」との関係で現れる［Greimas 1968: 89］。その場合、例えば、生の意味的領域中に、「死んでもいなければ、生体でもない、天使の生」も含まれる。同じく、「生きる死体」という概念も含まれるということになる［Hébert 2011: 43］。こうした更なる意味のすべてが、生の意味の構造に含まれるのである。

上記に即して言えば、本書の第1〜3章は、「意味の四角形」に「信」を応用したものと言える[4]。なぜなら、井筒は「不信心者」をテーマとする第1章で、まずはイーマーンの意味範囲を描写するためにクフルの解説からはじめているからである。また、クフルの相反である「信ではない」という概念についても叙述する必要があるが、本書の場合、それに相当するのは、イーマーンの含意でもある「フィスク（重罪、fisq）」になる[5]。事実、続く第2章では、「重罪人」が取り上げられている。同じく、「信」の相反である「信ではない」

3）事実、本書では、首尾一貫して、共時的な方法論が使われていると言える。本書で引用される学者や著作は、約1000年間の時代に散在するが、井筒は、彼らから引用する際に、時間的な流れに従わないからである。例えば、第8章において、イブン・カッラーム（‘Abdullāh Muḥammad ibn Karrām, 896 年没）に帰されるカラーム派（al-Karrāmīya）のイーマーン論について分析する際、1064年没のイブン・ハズムや1328年没のイブン・タイミーヤ（Ibn Taymīya）等の著作からも引用している［242–251頁］。井筒のこのような記述からは、何世紀間に点在する学者たちが、あたかも同じ時空に集まって議論しているかのような印象を受ける。

4）井筒の意味論的分析とグレマスの「意味の四角形」の関係について、筆者の知る限り、初めて指摘したのは、トルコの研究者のエキン（Y. Ekin）である［Ekin 2005: 99］。

5）本書において、「信」の構造の中に含まれている「重罪」が、同概念について詳しく論じられている井筒のもう一点の著作の *Ethico-Religious Concepts in the Qur'an*（『意味の構造――コーランにおける宗教道徳概念の分析』）の中では、クフルの意味構造の中で扱われている［Izutsu 2002: 156–162］。その違いは、意味論的分析の行い方によるものであると言える。澤井も指摘するように、意味論的分析には、「1）与えられたテクストを他の一切から切り離して、それだけで考察するという単独テクスト的な取り扱い方と、2）そのテクストをそれを取り巻く多数（あ

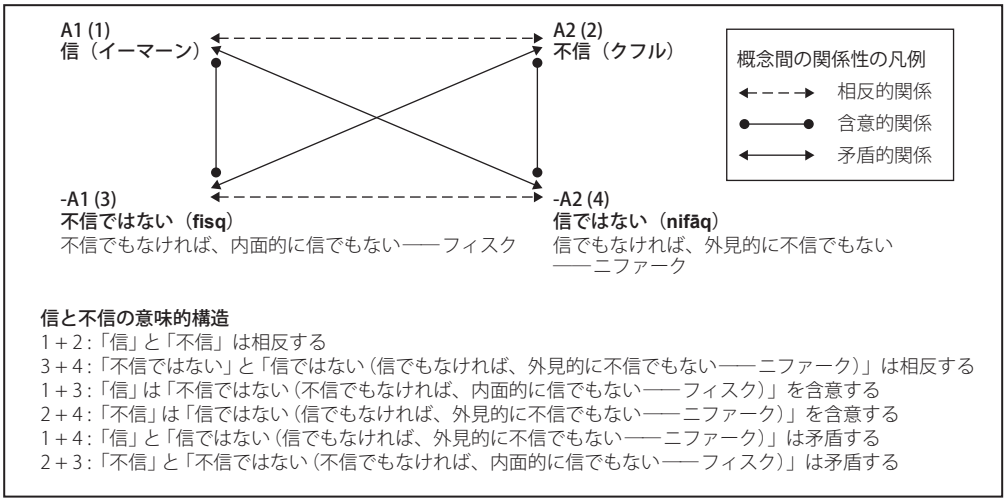

図 1　グレマスの意味の四角形説の応用――イーマーンとクフルの例

というコンセプトが派生するが、それは、「不信」の一種として扱われるニファークに意味的に一致する。ニファークについての独立の章はないものの、第 3 章の 77–84 頁において、それについて詳しく検討されている。これらをグレマスの四角形に当てはめてみれば、図 1 のようになる。

井筒は、そのようにして、本書の冒頭の 90 頁を、イーマーンではなく、それの相反的かつ含意的な意味の解説のために費やしている。イーマーンについての著作が冒頭からクフル、ニファークおよびフィスクを詳しく取り上げることは稀であるが[6]、それが井筒の独自の整理の方法によるものかについては、本書において語られていない。

また、井筒は、なぜ構造言語学の方法論を導入したかについても明記していないが、先行する類書の方法論と本書の方法論を比較することで、一つの手がかりが得られる。イーマーンを扱う欧米における先行研究の一つに、1932 年に刊行された、ヴェンスィンク（A. J. Wensinck）の『ムスリム信仰箇条――その起源と歴史的展開』（*The Muslim Creed: Its Genesis and Historical Development*）がある。本書でもしばしば引用されるこの研究は、アブー・ハニーファ（Abū Ḥanīfa, 767 年没）に帰される『大なる洞察（*al-Fiqh al-Akbar*）』の複数の異本を校訂しつつ、イスラームにおける信仰箇条（creed）の成立史について叙述するが、そこでは、典型的なオリエンタリズム的な言説が少なからず存在する。例えば、クルアーンが預言者ムハンマドの手による著作として見做されている他、クルアーンにおける「信」に関する章句に矛盾があるとも主張されている［Wensinck 1932: 4–5］。このような見方は、欧米において宗教的なテキストを研究する際にしばしば用いられるヘルメニューティック（hermeneutic）的な解釈方法を、イスラーム研究に導入したものであると言える。ヘルメニューティック的な立場でテキストが解読される際には、研究者が生きる時代からの理解ではなく、テキストが登場した時点における「オリジナル」な意味と、その後の歴史の中で生じた変化の解明が求められる。事実、ヴェンスィンクも、クルアーンがイスラームの信仰箇条を含まず、完成した信仰箇条が預言者ムハンマドの生前には存在せず、死後に作られたと主張する［Wensinck 1932: 9］。しかし、すでに竹下も指摘したように［Takeshita 1987: 497］、そのようなヘルメニューティック的な方法に対して批判的であった井筒は、「信」の起源や特定の時代における限定的な意味よりも、超時空的な構造としての意味

るいは無数）のテクスト群との複合テクスト的関連に置いて考察する」［澤井 2017 :18］という 2 つの方法があるが、井筒は、クルアーンとイスラーム神学書群を分けて分析するので、クルアーンにおいて、重罪がクフルの意味範囲に入っているのに対して、イスラーム神学に関わる著作においては、「信」の意味的構造に含まれるという、矛盾する 2 つの分析結果が得られることになる。これによれば、クルアーンとイスラーム神学の著作が内容的に相反するという、神学的な問題も生じるが、井筒は、その矛盾が如何に解決されうるかについては言及していない。

6）例えば、井筒がしばしば引用するイブン・タイミーヤは、信に関する作品『信の書（*Kitāb al-Īmān*）』において、もっぱらイーマーンとイスラームについて語っており、クフルやニファークについて詳しく論じていない。また、ヴェンスィンクもイーマーンのみを関心の対象にしている。

を追及している。井筒のこの手法は、当時のオリエンタリスト的なパラダイムに対して、オルタナティブな方法論を提唱しようとした先駆的な試みであると評者は考える[7]。事実、本書において方法論が重視されていることは、井筒自身も述べている[8]。

しかし、それまでにない試みであるがゆえに、本書には、その方法論から外れた部分もあるように思える。それは、評者が「分析概念」と呼ぶ一部の鍵概念のことである。「分析概念」とは、本書にしばしば登場する「性質、もしくは構成要素（ハスラ、khaṣla, *pl.* khiṣāl）」、「柱（ルクン、rukn, *pl.* arkān）」、「枝（シュゥバ、shu'ba, *pl.* shu'ab）」、「条件（シャルト、sharṭ, sharaṭ, *pl.* sharā'iṭ, shurūṭ）[9]」等の用語である[10]。これらは、イーマーンの内容と構成要素に関する議論の中で、ムスリム学者たちによって使われた、分析用の概念である。また、井筒自身も、これを活用している。しかし、イーマーン等の術語の意味範囲に関する分析が、これらの概念に適していないようである。それを以下で説明しよう。

分析概念の一つである「ハスラ」に、本書では、「要素（element）」［135, 145, 148, 153, 154, 155 頁］、「構成要素（constituent element）」［143 頁］［74, 97, 153 頁］、「本質的な構成（essential constitution）」［256 頁］、「本質的性質（essential nature）」［145 頁］等といった様々な訳語が付けられている。総じて言えば、すべてがイーマーンの構成要素について論じられる際に使われている。しかし、各々の登場箇所の文脈から考えると、イーマーンを、いくつかの要素から構成される複合体として理解する際も、イーマーンを分割し得ない単一のものとして把握する際も、使い分けがなされていないことが分かる。また、もう一つの概念である「柱」[11] も、イーマーンの要素やイスラームの５つの要素のそれぞれを表す助数詞のような形で、「ハスラ」の同義語として登場する。例えば、「いわゆる五柱（arkān）、つまりイスラームの５つの本質的構成要素の最終形態が成立したのは、ムスリム神学史の最初期において真に重要な意味を持つ出来事であった」［97 頁］という井筒自身の記述にあるように、イスラームの対象行為（五行）を表す概念として用いられている。また、ムルジア派のイーマーン論について論じる別の箇所では、「彼らはすくなくとも、アマルをイーマーンの「柱」の一つとは考えず、むしろ二次的重要性しか帯びないと見做した」［148 頁］[12] のように、イーマーンの構成要素という意味でも使われている。

7）井筒の方法論的なチャレンジは、イスラーム世界では、否定的かつ非現実的な捉え方として批判されてきたオリエンタリスト的な言説と比べて、中立的な捉え方として大いに歓迎され、彼の著作のイスラーム世界諸言語への翻訳活動が見られた。他方の欧米では、批判の的となった。例えば、本書と井筒の英文の著作『クルアーンにおける神と人間――クルアーンの世界観の意味論』を合わせて書評したワット（W. Montgomery Watt）は、井筒の記述方法について、「歴史性に欠けている」と批判している。「ハワーリジュ派から記述し始めたのにも関わらず、彼らの思想がどのような歴史的なコンテキストの中で登場したかについても言及がない」［Watt 1967a: 156］と具体例も提示するワットは、書評を書いた同年に、*Der Islam* 誌において、"The Conception of Īmān in Islamic Theology"（イスラーム神学におけるイーマーンの概念化）という論文を発表している。ワットの論文は、井筒によって構造言語学的に描写されたイーマーンに関する論争を通史的に再整理し、井筒と同様、ハワーリジュ派とクフルという概念からはじめて、各学者や学団の教説を、歴史的な流れに沿って手短に語っている。井筒によってすでに指摘された、「イーマーンをめぐる議論の起源はハワーリジュ派によるクフル論であった」という点を、ワットも、自らの論文の結論において、重要な論点として記述する［Watt 1967b: 10］。井筒の研究に見られるという「歴史性の欠如」は、井筒の意味論的方法論が導入されている著作群を対象にして総合的なもう一つの書評［Partin 1970］においても取り上げられているが、ワット程厳く批判されていない。ハワーリジュ派の台頭過程における政治的な背景について井筒が言及しているため、評者のパーティン（Harry B. Partin）は、ある程度の歴史的な背景の記述があると指摘して［361 頁］、ワットの批判を和らげている。

8）事実、井筒も、方法論を重視したことについて、結論において、「本書においては意味論的な分析の方法論的原則を背景として、その分析過程から導かれた結論だけを提示するように努めた」［368 頁］と明記している。

9）ここでは、「条件」という訳語を使うが、辞書的には「徴」という意味もある。その場合、単数形は sharaṭ であるが、複数形は sharā'iṭ もしくは ashrāṭ となる。なお、「条件」の意味の場合の複数形は、shurūṭ である［Muṣṭafā et al. 1996: 478–479］。シャルトは、ハナフィー法学派やマートゥリーディー神学派においてしばしば使われる分析概念であり、本質的にその中に含まれないにもかかわらず、それなしに物事が成立しない重要な条件、という意味で使われる。従って、本質的な要素という意味のルクンとは異なる［Zaydān 2015: 59］。

10）その他、イーマーンとイスラームの構成要素を表す、ハディースに起源を持つ概念としては、「基礎（mabāni', *sg.* mabnī）」もある。例えば、イブン・タイミーヤの伝えるところによれば、著名なスーフィーであるアブー・ターリブ・アル＝マッキー（Abū Ṭālib al-Makkī, 996 年没）の『心の糧（*Qūṭ al-Qulūb*）』においては、イスラームの五柱ではなく、5 基礎が使われている［Ibn Taymīya 1996: 260］。

11）「柱」の起源は、イスラームの「五柱」を説く、有名なハディースに由来する。本書では、イーマーンの諸要素を指す語としても利用される。

12）そのほか、236 頁や 258–259 頁においてもイーマーンの要素を表す語として用いられている。

このように、分析概念が、あらゆる学派の教説にも通じる一般概念として使われている[13]。そもそも、イーマーンの分割および増減に賛成するアシュアリー学派とムウタズィラ学派の教説では、イーマーンとイスラームについて、可算的な構成要素の存在が主張できるため、「ハスラ」や「柱」を、それぞれの要素を表す概念として使っても何ら問題がなさそうである。ところが、「信」の分割説を否認するハナフィー・マートゥリーディー学派やムルジア派等のイーマーン説においては、イーマーン自体が本来分割し得ない単一体であるとされているため、「柱」や「要素」という概念は不適切である。そのためであろうか、代わりに「条件」が使われることが多い[14]。例えば、ハナフィー学派のイーマーン論の特徴について論じている箇所で、「『行』はイーマーンの実現には絶対的に必要な条件であるが、その本質的構成要素ではないのである」[363頁・註14]と、この概念の使用が確認できる[15]。しかし、本書の文脈の中では、「条件」が「ハスラ」や「柱」のような概念であることが識別されていない。また「条件」も含めて、それぞれの概念が、各学派の立場によってどう把握され、どのような意味合いで使われ、それらの概念を通して得られる分析結果によってどのような意味の変化が起こったかについては、言及されていない。従って、本書では、イーマーンのような術語に施された意味的分析が、そういった分析概念にまで及んでいないと言えざるを得ない。

他にも、本書は、二重の翻訳を経て読者の手もとに届いているものであるため、どこまで原典に近い形で正確に翻訳されているかについても見る必要がある。なぜなら、意味的分析であるがゆえに、一つの概念の誤訳、あるいは原文の意味の誤解によって、大きな意味の変化につながる恐れがあるからである。しかし、二重翻訳された部分の確認は容易ではない。「監訳者あとがき」において指摘されているように、内容の正確性を保つために、翻訳対象の英語版のみならず、井筒の引用した原典との対校も行い、それに多大な手間がかかったという。その努力が実っていることは評者にも確認できた[16]。しかし、目に留まる点もいくつかあった。再版改訂の際に役立つよう、脚注にてその一部を記しておく[17]。

概していえば、本書が日本のイスラーム神学研究にとっての貴重な成果であることは、疑いない。そもそも、同分野に関する和文による類書の数は、片手で数えられるほど少ない。出版年の古い順に主なものを挙げれば、まずマフムード・アブ＝ル＝フダー・アル＝フサイニー著『イスラーム神学五〇の教理――タウヒード学入門』（奥田敦訳、慶応義塾大学出版会、2000年）がある[18]。同書は、アシュアリー学派に基づいて、一

13）事実、本書の末尾にある事項索引においても、「構成要素」と「五柱」[3頁]のみが挙げられており、アラビア語用語索引においても、「アルカーン」[7頁]、その単数形の「ルクン」[10頁]と「ヒサール（ハスラの複数形）」が挙げられている。なお、ヒサールの単数形やシャルト等は省かれている。

14）多くの学派や学団と同様、例外もある。例えば、ハナフィー・マートゥリーディー派の信奉者と知られるアル＝マグニーサーウィー（Abū al-Muntahā al-Maghnisāwī, Tr. el-Manisevî, 1592年没）は、「イクラールはイーマーンの『柱』である（…）」[240頁]と明記しているように、ルクンをイーマーンの構成要素として用いている。

15）条件が、ハナフィー・マートゥリーディー派のイーマーン論において重要な概念であることについても指摘されている。本書338頁では、「条件」と「本質的構成要素」が混同されると誤解が起こるということが、事例に基づいて解説されている。

16）例えば、11章の352頁において、英語テキストとアラビア語原典の間に翻訳の問題があることを発見し、正しい翻訳が、366頁の訳注9において提示されている。また、354頁において、求められる概念が入らないクルアーンの章句が引用されているが、翻訳者は、その概念が言及されている章句を見つけ、訳注10において読者に提示している。細かい点に見えるかもしれないが、このような誤訳や引用先の不一致の発見は非常に時間のかかる作業である。内容のわかりやすさに資する重要な貢献と言え、その努力を称賛したい。

17）116頁におけるジブリール（ガブリエル）の関係するハディースの文に、「善行であれ、悪行であれ予め定められている（…）」とあり、この「善行」と「悪行」という両概念が人間の行為の意味に限定して翻訳されているが、原語は、khayr（善）とsharr（悪）であって、一般に、行為のみならず、人間の身に起こる、幸・不幸のあらゆる物事に関わるはずである。従って、代わりに、「善悪すべての事物」という訳を一案として提示しておく。また、337頁における「イーマーンの創造説」について議論されている箇所で、「信仰告白」がもともとクルアーンの2つの章句（47:19と48:29）からのものであるため、「クルアーンの創造説」に関連付けて説明されているが、この箇所は難解であるため、訳注で言及すべきだろう。さらに、381頁におけるハディース、「バドルの戦いにおいて神の使徒は教友の一団と共に、彼らにこう言った。」とあるが、「バドルの戦い」は「アカバの誓い」であるはずである。387–388頁では、引用されている3つのハディース（35番、37番、38番）の中にiḥtisābanという単語があるが、それぞれ「この世での清算として」、「来世での報酬を期待するが故に」、「来世での報酬を求めて」という訳が付与されている。しかし、35番において「この世」、残りの二つでは「来世」と、意味が矛盾している。37番と38番の「来世」が正しい。そのほか、298頁の「ウマル」（正しくは、「ウマイル」）、308頁に引用されるクルアーンの章句のローマ字転写、113頁の「軛をかける（inqirān）」（正しくはiqtirān）といった誤字もある。

18）著者のアル＝フサイニーは現代の人であるが、この著作は、19世紀にアシュアリー学派の信奉者のために書かれた『カラーム学の常識』を底本にしている。奥田氏によって日本語に翻訳されたのは、その著作のアル＝フサイニーによる校定・再版バージョンである。

般のムスリムが日常の信仰生活において知る必要のある神学的な事項に関するものであり、イスラーム神学の全体像を描くものではない。複数の学派の教説の描写を試みたものとしては、松山洋平の『イスラーム神学』（作品社、2016 年）がある。スンナ派と異端諸派の教説に基づいて、様々な神学的な論点についての項目別の叙述がされている。しかし、異端諸派とスンナ派等が個別に扱われているため、各々の問題について、実際どのように議論されてきたのかは見えてこない。また、スンナ派の教説は、ウマル・ナサフィー（‘Umar ibn Muḥammad al-Nasafī, 1142 年没）の著作を中心に、それ以外の学者の意見が付されるという形式で記述が進められるため、ナサフィー以外の神学者の思想体系を掴みにくい。同氏によるもう一つの著作である『イスラーム神学古典選集』（作品社、2019 年）においても、神学書の翻訳・注釈という方法が継承されているが、スンナ派のみならず、シーア派とイバード派も含めた 11 点のテキストの全訳が収録されている点が異なる。複数の神学の原典を日本語で提供している点では大きな貢献であると言えよう。しかし、各学派や宗派の教説が簡潔にまとめられていても、学派や分派の間の論争がつながっていないため、それぞれの争点について、実際どのような論争が行われてきたかは見えてこない。

上記の既存の類書と対比して、筆者が井筒の『信の構造』を評価する点は、スンナ派と分派や異端とを分けず、「信」に関するそれぞれの立場の言い分を取り入れて、既存の和文のイスラーム神学の研究蓄積に、広さと同時に深さを与えたと考えられることにある。一例を挙げるなら、「信」について、松山氏の『イスラーム神学』がわずか 22 頁を割いているに過ぎないのに対して、井筒は、1000 年の期間中の 110 以上の神学者からの引用に基づいて分析する 400 頁余の紙幅を費やしている。そのような量的な差からも分かるように、「信」を通して、イスラーム神学の長い歴史に深くアプローチしているのである。また、構造言語学の意味的分析を通して、様々な時代に登場した各々の言説を議論上結びつけ、一つの構造として描くことによって、イスラーム神学全体を俯瞰的にみることを可能にしたと言えるだろう。

＜参照文献＞

アル＝フサイニー, A. M. 2000『フサイニー師「イスラーム神学五〇の教理」タウヒード学入門』（奥田敦訳著）慶応義塾大学出版会.

井筒俊彦 2005(1991)『イスラーム思想史』（中公新書）中央公論新社.

太田朗 1960『構造言語学』研究社出版.

ソシュール, F. 1991『ソシュール講義録注解』（前田英樹訳）法政大学出版局.

澤井義次 2017「井筒・東洋哲学の構築とその思想構造に関する比較宗教学的検討（平成 26 年度～平成 28 年度科学研究費助成事業・基盤研究（B）研究活動報告書）」.
<https://www.tenri-u.ac.jp/topics/q3tncs00001diyeb-att/hikakusyuukyougakutekikentou.pdf> (Accessed on 2019.12.31).

松山洋平 2016『イスラーム神学』作品社.

――― 2019『イスラーム神学古典選集』作品社.

Al-Akoub, E. 2012. “Izutsu’s Study of the Qur'an from an Arab Perspective,” *Journal of Quranic Studies* 14(1), pp. 107–130.

Arent, J. W. 1932. *The Muslim Creed: Its Genesis and Historical Development*. Cambridge: Cambridge Univerity Press.

Charnay, J. P. 1967. “Izutsu (Toshihiko) The Concept of Belief in Islamic Theology A Semantic Analysis of Iman and Islam,” *Archives de Sciences Sociales des Religions* 24, pp. 208–209.
Available at: <https://www.persee.fr/doc/assr_0003-9659_1967_num_24_1_2643_t1_0208_0000_1> (Accessed on 2019.10.13).

Ekin, Y. 2005. “T. İzutsu’nun Kur’an Semantiği Çalışmaları Üzerine Bir Değerlendirme,” *İslâmî Araştırmalar Dergisi* 18(1), pp. 96–107. Available at: <http://isamveri.org/pdfdrg/D00064/2005_1/2005_1_EKINY.pdf> (Accessed on 2019.10.13).

Greimas, A. J. and F. Rastier. 1968. “The Interaction of Semiotic Constraints,” *Yale French Studies* 41, pp. *86–105*. Available at: <https://www.jstor.org/stable/2929667?seq=1> (Accessed on 2019.10.13).

Hébert, L. 2011. *Tools for Text and Image Analysis: An Introduction to Applied Semiotics* (Trans. Julie Tabler). Available at: <https://pdfs.semanticscholar.org/8efb/82b11a799ff9481354036b5bab3140632213.pdf> (Accessed on 2019.10.13).

Ibn Taymīya, T. A. 1996. *Kitāb al-Īmān*. Bayrūt-Dimashq-ʻAmmān: al-Maktab al-Islāmī.

Izutsu T. 2002(1966). *Ethico-Religious Concepts in the Qur'an*. Montreal & Kingston: McGill-Queen's University Press.

Muṣṭafā, I., et al. 1989. المعجم الوسيط (*al-Muʻjam al-Wasīṭ*). Istanbūl: Dār al-Daʻwa (Çağrı Yayınları).

Partin, H. B. 1970. "Semantics of the Qurʾān: A Consideration of Izutsu's Studies (*God and Man in the Koran: Semantics of the Koranic Weltanschauung*. By Toshihiko Izutsu. Tokyo: Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies, 1964, pp. 248T; *Ethico-Religious Concepts in the Qurʾān*. By Toshihiko Izutsu. Montreal: McGill University Press, 1966, pp. ix+284; *The Concept of Belief in Islamic Theology*. By Toshihiko Izutsu, Tokyo: Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies, 1965, pp. ii+260.)," *History of Religions* 9(4), pp. 358–362.

Rosenthal, F. 2007. *Knowledge Triumphant: The Concept of Knowledge in Medieval Islam*. Leiden & Boston: Brill.

Takeshita, M. 1987. "Japanese Works of Toshihiko Izutsu with Special Reference to Reading The Koran," *Annals of Japan Association for Middle East Studies* 2, pp. 491–503.

Watt, W. M. 1967a. "Toshihiko Izutsu, *God and Man in the Koran: Semantics of the Koranic Weltanschauung*. 1964, pp. 242+4; Toshihiko Izutsu, *The Concept of Belief in Islamic Theology. A Semantic Analysis of Îmân and Islâm*.1965, pp. 11+250+10. (The Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies, Tokyo.)," *Journal of Semitic Studies* 12(1), pp. 155–157.

———. 1967b. "The Conception of Īmān in Islamic Theology," *Der Islam* 43(1/2), pp. 1–10.

Wensinck, A. J. 1932. *The Muslim Creed: Its Genesis and Historical Development*. Cambridge: Cambridge University Press.

Zaydān, ʻA. al-Karīm. 2015. *al-Wajīz fī Usūl al-Fiqh*. Cairo: Muʾassasa Qurṭuba. Available at: <https://archive.org/details/mrfarag2004_yahoo_20151231_0838/page/n87> (Accessed on 2019.10.13).

（イディリス・ダニシマズ　人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター研究員、
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科特任准教授）

臼杵陽『「中東」の世界史――西洋の衝撃から紛争・テロの時代まで』作品社　2018年　302＋xv頁

本書を手にし、まず目を引くのが「中東」にカギ括弧がついていることであろう。この理由について、「中東」が「世界の地域名の中で地理的な具体的名称を含んではいない例外的な存在」であることが指摘され、「そのこと事態がそもそも「問題」」であることから、「その問題性をカギ括弧で象徴させた」と著者は述べる（pp. 11–12）。また、その意図についても「この名称を持つ地域自体の伸縮自在性を意識してほしい」という著者の願望として述べられている（p. 12）。オスマン帝国が滅びた後の「中東」地域は、西洋列強の侵略に翻弄され、現在も政治的に不安定な状況が続いている。「アラブの春」の挫折や、IS（イスラーム国）の登場、難民の大量発生など、挙げるときりがない。本書は、こうした「21世紀の政治的な混乱を規定してきた歴史的諸要因をもう一度冷静に検討」し（pp. 13–14）、「中東」地域をめぐる近現代史を改めて辿り直したものである。内容は多岐にわたり、著者の長年の功績に基づく膨大なる知識や見解が散りばめられている。鋭い指摘がありながらも、歴史の一場面を想像させるような軽快な文章で綴られる本書は、読み手を当時の「中東」世界へと誘うものである。また、著者は歴史家E. H. カーの文言を引用しながら、歴史家がどのような意図で歴史を語るのかが重要であることを指摘した上で、本書が東アジアに位置する日本の立場を念頭に置くものとしている。そのため、随所に同時代の中東地域に関係する日本の知識人や政治家などの人物、日本の近